問題解決的な学習のプロセスにおけるメディアの位置
―戦後初期の単元「西陣織」実践に焦点をあてて―

樋口　とみ子

The Role of Media in the Process of Problem-Solving Learning: Focusing on the “Nishijin-ori” Unit in the Early Post-War Education

Tomiko HIGUCHI

Accepted November 5, 2025

抄録：本論文では、問題解決的な学習のプロセスのなかでメディアをどのように位置づけるべきかについて考察している。ここでいうメディアとは、情報を伝える媒体という意味であり、参照される図鑑・年鑑や雑誌、教科書、書籍などを指す。具体的な実践として、戦後初期に注目を浴びた永田時雄による単元「西陣織」を取り上げ、子どもたちとの問題解決的な学習のプロセスのなかでメディアがどのように生かされたのかを明らかにすることを目的とした。そのためのアプローチとして、第一に、単元「西陣織」の背景について、1950 年代中頃の問題解決学習の改革をめぐる論点を整理した。第二に、単元「西陣織」における問題解決的な学習のプロセスの具体を、さまざまなメディアとの関わりに着目して検討した。第三に、資料原典との比較を通じて、メディアが実践のなかで子どもたちの問題に対する認識を深めるために活用されていく様子を検討した。

索引語：問題解決学習、メディア、戦後初期、西陣織、永田時雄

Abstract: This study examines how media should be positioned within the process of problem-solving learning. Here “media” refers to information-conveying materials such as reference books, yearbooks, magazines, textbooks, and other books. As a case study, I focus on Tokio Nagata’s instructional unit “Nishijin-ori”（Nishijin Weaving）, a well-known example from the early postwar period, aiming to clarify how media was utilized in the problem-solving learning process with children. The approach comprises three distinct analytical steps: First, to provide context for the unit “Nishijin-ori,” I organized the issues surrounding the reform of problem-solving learning in the mid-1950s. Second, I examined the specifics of the problem-solving learning process in the unit “Nishijin-ori,” paying particular attention to its relationship with various media. Third, through comparisons with original source materials, I investigated how media was utilized in the practice to deepen children’s understanding of the problems.

Key Words: problem-solving learning, media, early post-war period, Nishijin-ori（Nishijin Weaving）, NAGATA Tokio

1. 課題設定

本論文は、問題解決的な学習のプロセスのなかでメディアをどのように位置づけるべきかについて考察するものである。子どもたちと問題の解決をめざす授業実践は、第二次世界大戦後、いわゆる戦後初期の経験主義にもとづく教育課程のなかで積極的に取り組まれた経緯がある。

当時は、子どもたちが問題解決に取り組むプロセスにおいて、当該テーマに関する直接体験や訪問・見学、聞き取り調査などの活動を自発的に行っていくことが重視された。戦後に初めて出された 1947（昭和 22）年版『学習指導要領一般編（試案）』「第 4 章 学習指導法の一般」では、次のように書かれている。「児童や青年は、まず、自分でみずからの目的をもって、そのやり口を計画し、それによって学習をみずからの力で進め、更に、その努力の結果を自分で反省してみるような、実際の経験を持たなくてはならない」。そこで、子どもたちによる具体的な「自発活動」の例として、「身体的な活動」や、物を分解したり質問したり書物を読んだりするなどの「好奇心を満足させる活動」、共同の遊びや調査などの「社会的な活動」、「ものをもてあそんだり組み立てたりする活動」、「劇的な遊びの活動」、詩や歌を作ったりする「表現の活動」、さらに「物を集める活動」などが示されている。

このように、子どもたちの「自発活動」が脚光を浴びるなかで、問題解決に関連するさまざまな資料を読み解き、対象への認識や理解を深めていくということはどのように位置づけられていたのだろうか。本論文では、問題解決的な学習のプロセスのなかで参照される資料である図鑑・年鑑や雑誌、新聞、教科書、書籍などを「メディア（media）」としてとらえ、その子どもたちにとっての位置づけについて具体的な実践を踏まえて検討することを試みる。メディアとは、もともと媒介物を意味する言葉であり、現在ではさまざまな意味合いを込めて使われる場合があるものの、本論文では、情報を伝える媒体という意味に限定して用いることとする。

具体的な実践として取り上げるのは、戦後初期に注目を浴びた問題解決学習の単元「西陣織」である。この実践は、1953（昭和 28）年度に京都市立日彰小学校[1)]で 5 年生を担任していた永田時雄[2)]（1924-2015）教諭の学級で取り組まれた。実践記録は、日本生活教育連盟（以下、日生連）の機関誌『カリキュラム』第 62 号、1954（昭和 29）年 2 月号（pp. 48-54）に掲載されたこともあり、「話題となった」（田中，1994，p. 219）。

そのため、永田による単元「西陣織」実践（以下、単元「西陣織」）についてはさまざまな先行研究がある。たとえば、日生連に所属していた広岡（1955）は、単に「子どもの主体的な立ちはたらき」に重点をおくのみならず、問題への認識、すなわち「客観的な事実、わけがらのなかをシッカリとくぐりぬける問題解決の傾向」をあらわした一例として永田の単元「西陣織」を評価している（pp. 223-224）。また、日比（1968）も「日生連の代表的な単元学習の実践例」として単元「西陣織」を位置づけた上で（p. 68）、その問題解決型の単元においては、子どもたちの学習意欲や追究する態度が尊重されるだけでなく、客観的知識の存在を視野に入れて「子どもに知識の主体的組織を深めさせていくことが重要」であることを示唆したと指摘している（日比，1976a，p. 105）。

一方、単元「西陣織」に対しては、機関誌『カリキュラム』に掲載された直後から、批判も寄せられていた。代表的な例を挙げれば、桑原正雄による論考「問題解決学習と系統的学習」がある（桑原，1954a）。ここで桑原は、永田の「西陣織」実践が「たたみかけて問題を解決し

ていくエネルギッシュな手法」をもっていることに「深い敬意」を示した上で、問題点として、「地域の一つの問題に重点がしぼられ」てしまい、「総合し発展させて、より高い視野から、全体を見とおす学習が考えられていない」と指摘している（pp. 27-28）。桑原によれば「問題解決学習は、子どもたち自ら考え、行動する、新しい進んだ学習の方法だとは思うのですが、それだけでは困るのです。問題解決学習は、ながいあいだの教育的な計画と体系、つまり系統的な学習のうらづけがあってこそ、はじめて生きてくるのではないでしょうか」という問いが提出されている（p. 30）［強調は原典のまま］。このように、子どもたちの興味・関心や主体的な活動を尊重することと、客観的な知識を系統的に組織していくことの両者の関係を問う必要性が早くから提起されていた。

その後の先行研究においても、子どもたちによる意欲的で実感のこもった問題解決のプロセスが注目を浴び、「西陣織の現状と問題点についての知識・理解と、問題解決の意識や態度・能力を統一的に育成すること」を試みている点が評価される一方で（小原，1998，p. 342）、子どもたちから出された解決策が「一面的」であることや（川合，1979，p. 69）、単元展開のなかで「子どもの認識にさしたる変化がない」ことなどが指摘されてきた（二杉，1983，p. 118）。

とりわけ、髙山（2014）においては、問題の解決策が「一面的、皮相的結論」に陥った要因を探るなかで（p. 15）、結局は「問題追究の方向付けが教師によって行われ」、子どもたちを「教師の教材解釈に無理に沿わせようとした」ものであることが指摘された（p. 21）。

山根（1990）も、子どもたちが「永田氏のとらえていた問題認識と解決策を追認するに留まっている」という問題点を挙げ（p. 47）、その原因として「子どもたちが資料から読み取れることと読み取れないことを明確に区別したり、検討しないままに発言が繰り返されているということ、そして、教師もその点についての指導をしていない」ということを指摘している（p. 46）。本論文は、ここでいう「資料」、すなわち情報を伝えるメディアと問題解決の関係に着目する。つまり、子どもたちがメディアという媒体から西陣織に対する認識をどのように変化させているのか、あるいは変化させていないのかに光をあてる。

すでに中西（2013）では、永田が教材研究で参照した資料とされる、堀江英一・後藤靖による『西陣機業の研究――中小工業の実態』（有斐閣，1950）という書籍の原典と実践記録の内容とが比較されている。その結果、原典においては言及されている「西陣織の近代化」や「発展」の様子に永田は触れておらず、むしろ「西陣（地域・機業）は遅れている」という「単純で分かりやすい概念」を子どもたちに「注入」するため、「基本資料さえも大胆に相対化する」姿勢をもっていたことが指摘されている（p. 42）。

この『西陣機業の研究――中小工業の実態』以外にも、永田が参照した資料は多数存在する。また、永田による教材研究の場のみならず、子どもたちとの問題解決のプロセスのなかでも、さまざまな資料が用いられている[3)]。そこで、本論文では、単元「西陣織」で用いられたさまざまなメディアに着目し、それらが永田の学級における子どもたちとの問題解決的な学習のプロセスのなかでどのような位置にあったのかを明らかにすることを目的とする。

そのためのアプローチとして、第一に、単元「西陣織」の背景について、1950 年代中頃の日生連が取り組んでいた問題解決学習の改革をめぐる論点を整理する。第二に、単元「西陣織」における問題解決的な学習のプロセスを、さまざまなメディアとの関わりに着目して概観する。第三に、原典と比較することを通して、実践のなかで用いられたさまざまなメディアが問題の

解決に向けてどのような意味をもったのかに迫りたい。なお、引用にあたって旧字体は新字体に改めた。

2. 単元「西陣織」の背景

(1) 日本生活教育連盟と問題解決学習への批判

永田が単元「西陣織」に取り組んだのは、戦後初期の経験主義にもとづく新教育期であった。とりわけ、1947（昭和 22）年版学習指導要領において新設された社会科について、永田は後年、次のように述べている。「自分が受けてきた教育の中にはなかった社会科という教科は、私にとっては新しい教育の方向や魅力がかくされているような感じがして、私は、社会科の学習指導にしだいにうちこむようになった」（永田・原，1960，p. 149）。その背景には、「戦争中に限られた学習しか許されなかった人間の自由な研究への衝動的な欲求」があり、それは永田自身が「敗戦による解放の中で必然的に求めた道」であったかもしれないとされている（p. 149）。

その永田が「社会科の研究に志し、いろいろと実践上の問題で行きづまった時、多くの示唆を受けることのできた」のが「日本生活教育連盟」であったと推察できる（永田・原，1960，p. 163）。

日生連は、もともとコア・カリキュラム連盟（以下、コア連）という名称で 1948（昭和 23）年に発足した民間教育研究団体であり[4]、経験主義にもとづく戦後の新教育運動のなかで「新しいカリキュラム研究を中心として、相互に研究の成果を交換し、すすんでこの運動を広く全国に展開する」ことをめざしていた（「巻頭言」機関誌『カリキュラム』創刊号, 1949 年 1 月号, p. 1）。コア・カリキュラムの中心に問題解決型の社会科を位置づけつつ、カリキュラム全体のあり方を独自に追究していこうとする自主編成への意気込みがそこにはあった。

なかでも、コア連の機関誌『カリキュラム』の創刊号（1949 年 1 月号，pp. 15-17）に掲載された樋口澄雄による実践「二年の単元：ゆうびん」は、私たちが手紙を送ったり受け取ったりするにはどうしたらいいかという「問題」について、教室のなかで子どもたちと郵便局の仕組みを実際にやってみることによって学ぶというスタイルをとり、「ごっこ」学習の典型として注目を浴びた。暗記によるのではなく、生活のなかの「問題」に子どもたちが意欲的な活動を通してアプローチするなかで、郵便の仕組みのほか文字や計算、図画などについても学んでいくという点に光があたったといえる。

しかしながら、一方で、こうした「ごっご」学習に代表される単元は「牧歌的」であるとして、その問題点を指摘する声も上がった。当時、コア連の内部にいてコア・カリキュラムのアメリカ合衆国からの輸入的性格を批判した広岡亮蔵は、まさに「牧歌的なカリキュラムの自己批判」と題する論考において、もっと根本的で日本社会が直面する切実な課題として「生産復興」「輸出振興」「前近代性払拭」などのテーマを「問題領域」として取り上げる必要性があるのではないかという提起を行った（広岡，1950）。

なお、1953（昭和 28）年 6 月にコア連から日生連へと連盟が名称変更した後も継続して所属していた広岡は[5]、「敗戦後四、五年の新教育の当初には、生活や解決の考え方に小甘いものが多かった」（広岡, 1955, p. 217）と当時を振り返っている。広岡によれば、その理由は二つある。一つは、問題解決学習における「問題」、つまりテーマの設定が「かなり出たとこ勝負の、のん

びりしたもの」が多く、「無政府状態」に陥る傾向にあったという（pp. 217-218）。もう一つは、「学習展開」に関して、たとえば戦後復興の町づくりを考える場合、これから私たちは水道を引き、下水道もつけ、幅の広い道路や公園、遊園地などをあちこちにつくっていきましょう、といった調子の解決策となり、まるで「打出の小づちからポンポンと打ち出すように他愛なく、アラジンのランプをこするような無造作ぶり」であったと広岡は指摘している（p. 218）。

このように、当時の「はいまわる経験主義」などの批判と相まって、コア連・日生連の問題解決型の単元に対する「牧歌的」性格の指摘は、すでに 1950 年代前半までに生じていた。

(2)「日本社会の基本問題」の提起

さらに、1950 年代に入ると、戦後の道徳教育のあり方が議論されるなかで、社会科と道徳教育との関係も問われるようになっていた。社会科を「解体」あるいは「廃止」して、「修身や公民、歴史、地理などの諸学科を復活したいという声」も出始めていたという（梅根，1953，p. 14）。たとえば、1953（昭和 28）年 8 月 22 日に文部省は「社会科の改善についての方策」を発表する[6)]。そこでは、「民主主義の育成に対して重要な役割をになう社会科の基本的なねらいはこれを正しく育てていくが、これまでの指導計画や指導法の欠陥を是正し、道徳教育、地理、歴史教育の充実を図るという根本方針がとられた」という（文部省編，1981）。

これに対して、それまで社会科を中心に問題解決学習に取り組んできた日生連は、「連盟としての社会科改訂対案を示すべき」として、1953（昭和 28）年 9 月に「単元系列作成委員会」を設置し、社会科はどうあるべきかに関する討議を独自に進めていった（「＜われわれの対案＞社会科の内容系列と主要な学習主題」機関誌『カリキュラム』第 67 号，1954 年 7 月号，p. 50）。

そこで、同じく 1953（昭和 28）年 9 月号の機関誌『カリキュラム』から始まった連載特集が「日本社会の基本問題と単元学習」である。単に指導法のみならず、扱う単元の内容に関する「歴史、社会的な意義の研究」と結びつけて「問題」の中身を考えようとする姿勢がここに示され、「専門学者」と協力して研究が進められることになった（「はじめに」『カリキュラム』第 57 号，1953 年 9 月号，p. 46）。そこで当時の日本が抱えていた切実な社会問題を取り上げ、その解決のあり方について社会認識をもとに考える単元学習が模索されたのである。次ページの表 1 は連載のタイトル一覧である。本論文で取り上げる永田の単元「西陣織」は、この連載のなかで取り上げられたという経緯がある。

永田は、第 62 号で自身の実践記録が掲載される前、第 59 号（1953 年 11 月号）の「単元『近代工業』の研究」に寄せられた経済学者の楫西光速[7)]による論考「『近代工業』の分析視角について」を参考にして単元「西陣織」に取り組んでいる（永田，1954a，p. 48）。

なお、「日本社会の基本問題」という名称は、もともと大内兵衛・矢内原忠雄・羽仁説子・宮本百合子・羽仁五郎らによって書かれた『日本社会の基本問題』（日本太平洋問題調査会編，1949）にも見られる。そこでは、財政金融や宗教・民主主義のあり方、家族制度や文化などについて論じられていた。この著作は当時の教育界でも話題となっていた。また、日生連に所属していた馬場と、上述の楫西による共編の教科書『日本社会の基本問題――高等学校一般社会』（文部省検定済）も 1952 年に出版されている。

こうした動きのなかで、日生連によって独自に提起された「日本社会の基本問題」は、具体的な中身として「自然災害問題」「健康問題」「農村漁村問題」「中小企業問題」「工業、労働問題」

表１　機関誌『カリキュラム』における特集「日本社会の基本問題と単元学習」掲載タイトル一覧

掲載タイトル	実践の場所と主な実践者等	巻号
（1）単元『米』の共同研究	秋田県増田小ほか	第57号（1953年9月号）
（2）広島県御調郡・東谷氏の実践『鍬』を検討する	広島県坂井原小・東谷博	第58号（1953年10月号）
（3）単元『近代工業』の研究	東京業平小・高木浩朗	第59号（1953年11月号）
（4）単元『水害と市政』の検討	熊本大付属中・吉田定俊	第60号（1953年12月号）
（5）『ごっこ』の再検討		第61号（1954年1月号）
（6）単元『西陣織』〈中小工業〉（五年）の研究	京都市日彰小・永田時雄	第62号（1954年2月号）
（7）単元『牛ヶ首用水』（四年）の研究	富山県長岡小・永田正久・宮島冨美	第63号（1954年3月号）
（8）単元『新聞とラジオ』の再検討	和光学園・横山隆吉	第64号（1954年4月号）
（9）単元『交通と運輸』についての比較研究	神奈川福沢小、東京業平小、兵庫明付小、福井惜隠小、京都日彰小、鳥取末垣小、広島土生小ほか	第65号（1954年5月号）
（10）子どもの生活問題にきりこむ問題解決学習単元『九十九里』（漁村問題）の構成	千葉県片貝中・馬場・皆川・海老原・三上	第66号（1954年6月号）

【出典】日本生活教育連盟の機関誌『カリキュラム』をもとに筆者作成。

「現代文化の問題」「社会計画化問題」「政治問題」「民族と平和の問題」によって構成された。それは、「歴史的発展の過程において構造的に発生し、事実として現存するもの」と定義づけられた（「＜われわれの対案＞社会科の内容系列と主要な学習主題」機関誌『カリキュラム』第67号，1954年7月号，p. 51）。表現を少し変えれば、「日本の近代社会の歴史の進行過程において生じて来、そして現存している諸問題の、社会構造的な断面」であったとされる（広岡，1955，p. 220）。

日生連は、これらの「日本社会の基本問題」を社会科で取り上げるため、発達段階等も考慮して、次ページの表2のように構造化した。本論文で取り上げる単元「西陣織」は、小学校高学年の「中小企業問題」と「工業労働問題」にかかわる「企業形態と労働」に該当する。そこでは、大企業と中小企業の比較や長短の考察、労働の仕組みと労働環境の改善のための努力等を扱うことがめざされた。

3. 単元「西陣織」における問題解決のプロセス

(1) 単元設定の根拠

以上のような背景とともに、永田は、従来から農村部に対して「切実な生活の問題を持っていない」ため問題解決学習の展開が難しいと言われてきた都市において（永田，1959a，p. 1）、その具体的な実践に取り組むことを決意する。

その際、永田による単元設定の背景には、先述のように『カリキュラム』誌上ですでに取り

表 2　日本生活教育連盟による問題系列「日本社会の基本問題」

基本問題		自然災害	健康	農山漁村問題	中小企業問題	工業労働問題	現代文化問題	社会計画化問題	政治の問題	民族と平和の問題
幼稚園		私たちの身体		さまざまなしごと			こと ば	なかよし		
低学年	1	健康の習慣 病気		さまざまなしごと			アソビの工夫	共同生活		
	2	健康の習慣 病気		さまざまなしごと			アソビの工夫	共同生活		
中学年	3	安全	すまい	農家のくらし	工場		健康なアソビ	自治活動		
	4	災害	病気と病院	農業生産の改善	工場のしくみ		生活と文化	共同生活のしくみ		人間の尊重
高学年	5	災害対策	衣食住と国民病	日本の農業	企業形態と労働					
	6						報道と娯楽機関	社会生活の計画化	政治の民主化	基本的人権
中学校	1	自然改造	国民保健	農山漁村問題				綜合開発		
	2				中小企業問題	労働問題 / 工業問題				
	3						現代文化	社会保障	現代政治の問題	民族と平和の問題

【出典】日本生活教育連盟の機関誌『カリキュラム』第 67 号，1954 年 7 月号，p. 56。

上げられていた「近代工業」に関する単元への楫西の提案が少なからぬ影響を与えたと考えられる。

その提案のなかで楫西（1953）は、近代工業をとらえる際の重要なポイントについて、「生産技術の機械化」→「生産能力の増大」→「生活水準の向上」のように「使用価値の立場」からの「大きな発展」だけでなく、「交換価値」の立場を考えなければならないと指摘した。「交換価値」とは、楫西によれば、「資本主義社会の組織の問題」を意味し、具体的には資本家と労働者の関係、また大企業と中小企業の関連にも目を向けなければならない。そこにある「従属関係あるいは対抗関係」を「見きわめる」ことは「近代工業研究のための必要かくべかざる前提条件」であるとされた（pp. 52-53）。

こうした分析視角から西陣織の工業を検討すれば、①「生産工程の非科学的なこと」、②「生産組織に封建性が根強く残存し、主従関係によって業者が結ばれていること」、③「封建性が残存し産業革命以前の生産方法をとっているままに、そこにすでに資本主義生産の矛盾が現れて零細な起業家ならびに賃織業者が危機に瀕していること」などの「問題」があると永田はとらえている（永田，1954a，p. 48）。楫西が指摘したような、いわば日本全体の産業にかかわる課題が、西陣織の工業に「象徴的に現れている」とみなしたわけである。

その上で永田は、京都市にとっての「代表的な、また重要な郷土産業」でもあり、担任している日彰小学校の「子どもたちの関心もとくに深い」西陣織を取り上げ、「生産にまつわる矛盾を指摘し、さらに改善への意欲を育てたい」として実践に取り組んだ[8]（永田，1954a，p. 48）。

そのため、問題解決的な単元の目標として、まず「矛盾」（問題）については、西陣織が家内工業、手工業、家族労働によって支えられるとともに、他の廉価な大量生産に圧迫されて販路が縮小しているという現状を認識すること、次に、その問題を「改善」する方向性としては、「非科学的」生産法や「封建的な生産組織」を「改革」するとともに、高級品のみならず大衆向け

の実用衣料をつくることで市場を獲得すること、を永田は掲げた。つまり、単元目標の設定時において、楫西の提案にもとづく「矛盾」の中身と「改善」の方向性を永田が想定していたと考えられる（永田，1954a，p. 48）。

もちろん永田は、その他の目標として「問題解決の結論を、歴史的地理的に広く研究して広い視野から多角的に出す学習能力を養う」ことも掲げ、「広く」「多角的に」ということにも配慮しているものの（永田，1954a，pp. 48-49）、問題の中身と解決の方向性は、あくまで当時の日生連による「日本社会の基本問題」への期待に沿うかたちであらかじめ想定されていたということができるだろう。

というのも、永田の実践記録が掲載される以前、1953 年 12 月号の機関誌『カリキュラム』（第 60 号）には「単元研究だより」として、永田が日生連の本部へ、レポート「問題をもたない地域・子どもと単元学習」とあわせて、自身による構想（プラン）段階の単元「西陣織」を送ったことが記されている。その内容について、日生連本部の馬場四郎は、「生産力の高い、都市化と工業化の水準が進んでいる西南日本や、大都市」で問題解決学習を展開するのは容易ではなかったところを永田がその「蕾（つぼみ）」をつけたという点に敬意を表しつつも、単元「西陣織」の構想（プラン）については「生産様式の近代化、合理化に視点をおきすぎてしまって生産関係にまつわる矛盾を掘り得なかったのではないかという疑問」を呈している（p. 51）。構想（プラン）の段階での単元「西陣織」に対してこのような指摘がなされたことを永田は意識し、それに応えようとしていたものと考えられる。

（2）単元展開

永田（1954a）によれば、実際の単元はおよそ次のように展開した。①西陣織について知っていることを話し合う、②西陣織の実物を眺めて特徴を発表する、③作り方を調べる（a 今までに知っていること・聞いてきたこと、b 工場見学・資料の作成と検討）、④昔の西陣織の様子を調べる、⑤桐生、福井の生産の様子を調べる、⑥西陣織がこれから発展するためにはどうすればよいかを中心に作文をつくり、単元の学習のまとめをする。

こうした単元展開について、子どもたちの意見や出てきた疑問とあわせて、問題解決に向けて参照されたメディア（資料等）との関連をまとめたのが次ページの表 3 である。

表 3 にあらわれているように、単元「西陣織」は、疑問や問いがつながっていくなかで、さまざまな資料を生かして展開されていることがわかる。実践記録からは、永田が、子どもたちから出てきた声に耳を傾け、ところどころで焦点化したり活動を促したり、メディアとしての資料を提示したりし、そのなかで出てきた子どもたちの意見をまたすくいあげ、さらに次の活動を進めていくということをスパイラルに繰り返していったと考えられる。

4. 単元「西陣織」におけるメディアの生かし方

以上のような単元展開を、先述の広岡は高く評価した。広岡によれば、「これはすぐれた単元展開である。とかくおちいりがちな上っついた小甘い問題解決学習ではなく、西陣機業のリアリズムを、がっちりと追究していく厳しさがある。この迫るきびしさはどこからでてきただろ

表 3　単元「西陣織」の展開

活動	子どもたちの意見と【疑問や問い】	メディア（資料等）
①　西陣織について知っていることを話し合う（既有の知識経験）	・冠婚葬祭や外出の時に着る　・和服だけでない ・なぜ高価なのか　・きれいな模様 ・どうして作っているか　・手で織る ・いつ頃、だれが発明したのか　等	・板書［本論文の注９の図２を参照］
②　西陣織の実物を眺めて特徴を発表する（種類や用途）	・種類が多い　・和装用のほか洋式もある　等 【〝どうして作るのだろう〟】	・父母の着物やネクタイ等
③　作り方を調べる		
(a) 今までに知っていること、聞いてきたこと	・高級品は手工業でないと機械ではできない ・織り方は十年位習わないと覚えられない ・非常に細かい分業に別れてできあがる。長い時間がかかり、高い値段になる　等 【どんな所で、どのようにして作っているのか】 ・家のなかでやっているから地図に出ていない ・小さな工場や賃織がほとんどだ　等	・家の人や近所の業者に聴く ・京都市の地図 ・京都年鑑（都出版）
(b)「矢代御召工場」（大工場）の見学、資料の作成と検討 …「西陣織を作るために働く人々」（矢代御召工場で入手） …表「西陣織が消費者にとどくまで」（この表の順に工場を見学） …表「原料の生糸が製織をする人にとどくまで」（後藤靖から入手） …表「西陣織の生産に使われている機械と働く人々」 …表「西陣織を作る人々（生産の形態とそのちがい）」の作成	・工場見学 【大工場（矢代御召工場）以外の小工場や賃織の様子はどうだろう】 ・細かく別れた分業　・仲買が多くて値段が高くなる　・できあがるまでに二十軒程の家を通る ・大工場は安く買える　・小工場は高くつく ・小工場や賃織が多い　・大工場は力織機が多い ・小さな工場で家族だけで手織機が多い ・大工場のような方法でやらないとだめだ ・賃織の人はかわいそうだ　・織元はずるい ・もっと仲買を少なくすれば ・もっとジャガード機や力織機をたくさん使う等 【どうしてこんな不公平な生産の形態に分かれたのだろうか】【昔はどうだったのだろう】	・子どもたちによる自主的な資料集めや見学調査 ・京都大学の堀江英一と後藤靖を訪問（永田） ・入手した表 ・作成した表
④　昔の西陣織の様子を調べる（年表の作成） （現代の課題と特色を調べて、解決策を考える）	・ぜいたくな高級品を命令で織っていた ・小工場でうまくやっていった人は大工場になったが失敗した人は賃織におちぶれていった ・大工場は明治時代に資本をなげこみ機械を買ってたくさんつくりもうけた ・貧乏な人の多い今の日本ではもっと安い品物をつくるようにしたらよい ・もっと機械を作って大量生産し、安い値段のみんなが買えるようなものを作ればよい　等 【西陣は今でも手織機が多いのはなぜだろうか】	（教師用） ・『西陣機業の研究』 ・『西陣史』 ・『織物の西陣』 （子どもたち） ・見学の時に集めた資料と村の古老からの話 ・作成した年表
⑤　桐生、福井の生産の様子を調べる（桐生・伊勢崎地方グループと福井地方グループにわかれる） （西陣織と違う点はどんな点か） （西陣織と似ている点は何か）	【他の地域にも賃織業者等はいるか】【うまくいっているか】 ・福井は明治の終わりに機械工業となり、国内向けの品物を作っているがうまくもうからない ・桐生・伊勢崎は昭和の始めごろまでに機械化され、大衆向の実用品を作っているが、化学繊維による安い品物が出てきて売れずに困っている ・安い値段の実用品や輸出品を中心に作っている ・機械化が進んでいて大量に安い値段で生産 ・原料の得やすい生糸の生産地が近い ・副業として発達してきた　・大工場が多い ・技術が西陣織に比べて簡単 ・戦前のようには売れない ・洋服が増えて着物の売れる量が減ってきた　等	・社会科教科書『めぐる機械』『生活は進む』 ・『綴方風土記』 ・『少年朝日年鑑』 ・機械化の状況（1936年）と工場規模別の割合（1938年）の比較表
⑥　西陣織がこれから発展するためにはどうすればよいかを中心に作文をつくりこの単元の学習のまとめをする	【西陣織がこれから発展するためにはどうすればよいか】 ・もっと機械を取り入れて、作る人のくらしがもっと楽にできるようなやり方にしないと ・みんなで力をあわせて工場をたてる ・もっと誰でも買えるようなものをつくる ・安い原料を買って西陣織のよい柄をおる　等	・文集の作成

【出典】永田（1954a）と永田（1957a）をもとに筆者作成。

うか。それは、子どもの操作経験を、たんに内から組織する経験主義にとどまらないで、西陣機業がもつ客観的現実に即しよう、密着しよう、なかをくぐりぬけよう、とするところからきている」（広岡，1955，p. 226）。

では、「西陣機業がもつ客観的現実」をくぐりぬけようとするとき、メディアの原典はどのように生かされたのだろうか。永田自身、「冷厳な生活現実を示す統計資料を適宜とりあげる技術」は、「子どもたちの社会認識を、あくまでも科学的な思考に近づけていく」ためにも重要だと述べている（永田，1960a，p. 47）。

単元「西陣織」では、まず中小企業・零細企業が多いという重要なポイントに迫っていく際、西陣織をどうやって作っているのかを調べていくなかで、地図上では工場が 3 つしか見つからなかったという事実に出会う。そこで、『京都年鑑』を調べてみると、大工場 10 戸以上、小工場 30%、「家族だけでやっているもの」（＝賃織）70%であり、全体で 5000 戸であるという数字が出てきたとされる（永田，1954a，p. 50）。なお、資料を読み解く上で、「%の理解は 5 年生ではむずかしいと思われたが、一学期単元“米”で、その資料をよむ上に必要なのでその時思い切って指導した」と永田は書いている[9]（p. 50）。資料を提示する際に、そこから何が読みとれるのかについて子どもたちとの共通理解を図ることを永田は怠らなかったと考えられる。実践記録には、この時点で、すでに子どもたちが集めてきた資料で教室の掲示板がいっぱいになっていたと記されている。

そこで、子どもたちによって集められた資料や現場調査、さらに永田が経済学者の後藤靖[10]から受けた資料（表「原料の生糸が製織をする人にとどくまで」）を「合同でまとめ」「たびたび討議をして」新たな表をいくつかつくり、それらが「子どもたちの手でプリントにされた」（永田，1954a，p. 50）。とりわけ、注目すべきは、集まった表や資料を一つ一つ検討するなかで、共通点が多くあることに気づき、永田と子どもたちが共同で新たに「西陣織を作る人々（生産の形態とそのちがい）」という表をつくりあげていったとされる点である。永田は、縦軸に「大工場（完全に機械化された工場）」「小工場（手機と力織機）」「賃織」「織元」を並べ、横軸に「資本」「製法」「原料」「販売（販路宣伝）」「労働」という枠をつくって黒板一面に書き、そこに子どもたちと特徴を書き込んでいったという。「子どもたちはこの表を見てこれはよくわかるといってよろこんだ。しかも自分たちで作ったよろこびもあったのであろう」と記載している（永田，1954a，p. 50）。この活動をもとにさらに話し合うなかで、大工場に対する小工場・賃織の不公平さに子どもたちの認識が向かう流れになっている。

永田によれば、子どもたちは「西陣織は自分たちの郷土の名産であるとばかり思いこんで、誇りを感じていたが、その作り方をしらべる時、誇ってばかりはいられない問題があることに気づいた」というわけである（永田，1957a，p. 141）。大工場との違いに気づいた子どもたちの「純真な怒り」は強く、「往々に感情的に走り早急な結論をめざして足もとがうく」のを避けるため、永田は問題の原因の究明に子どもたちの目を向けていく（pp. 141-142）。

そこで「不公平な生産形態」に分かれた理由を探るために、歴史研究と比較研究が行われる。まず、歴史研究においては、白年表を作った上で、教師である永田は『西陣機業の研究』『西陣史』『織物の西陣』などをもとに、子どもたちは集めた資料や町の人々から聴きだした内容をもとに、その白年表に事実を書き込んでいった。それは、「原始時代」「大和時代」から始まり「飛鳥時代」「奈良時代」「平安時代」「鎌倉時代」「吉野時代」「室町時代」「桃山時代」「江戸時代」「明治時代」

「昭和時代」で構成された（永田，1957a，pp.143-145）。具体的に記載された内容は、たとえば「大和時代」に「応仁天皇の御代に中国（しん）から織り方が伝わった」ことに始まり、「室町時代」には「『西陣』の地名が生れた」ことなどが調べられ、江戸時代からの記載分量はかなり多くなっている。「子どもたちは史実には非常な興味をもち、年表作成はきわめてたんねんによろこんでやった」（永田，1954a，p. 51）と記されている。「それからどうなったのですか」「こんどの時間はどうなるのですか」などの質問もとび出すほどだったという（永田，1957a，p. 142）。

歴史をたどることにより、いまでは「特権階級の庇護」が西陣織になくなり「はげしい資本主義の生産競争」に巻き込まれていることを認識した子どもたちから、「福井は大正のはじめに、桐生は昭和の始めに機械化が完成しているのに、西陣は今でも手機織が多いのはなぜだろう」という問いが出てくる（永田，1957a，p. 147）。そこで比較研究に移っていく際には、福井地方を調べるグループと、桐生・伊勢崎地方を調べるグループに分かれて、「西陣とちがう点はどんな点か」という観点で教科書や『綴方風土記』『少年朝日年鑑』をもとに調べていったという。

その結果、福井や桐生・伊勢崎では安い値段の実用品や輸出品を中心に作っていること、機械化が進んでいて大量に安い値段で生産できること、また原料の生糸の生産地が近いことなどが明らかになる一方で、子どもたちから「たしかに西陣織の生産はおくれているが、よく似ていることも多いなあ」という声がでてきて、共通点についての話し合いが始まったという。それは、他の同業の生産組織に対する西陣織の「後進性」を発見させようとする教師の意図を超えて、つまりそれだけでは子どもたちが「ことたれりとせず」、自ら動き出したものでもあったと永田は振り返っている（永田，1954b，p. 25）。

たしかに、原典『綴方風土記』を開いてみると、福井地方では「不景気なはたや」という大きなタイトルで「戦後はすっかり悪くなった上、規模が小さく大工場が少いのでずい分苦しいありさまとなった」ということや（下中編，1953b，p. 195）、桐生・伊勢崎地方については「ここでとれる生糸と、農家の安い労働力が発達の力となったが、いまでも問屋制度の下に作られ、近代的な企業になっていない」ということが書かれている（下中編，1953a，p. 292）。また、原典『少年朝日年鑑』においても、「有望な化学せんい工業――合成せんいにおされる蚕糸業」という太字の見出しのもと、昭和「26 年の絹織物の生産は 1 億 5800 万平方ヤードで、戦前の 41.5%となり、生産の 25.4%が輸出されました」と記載されるとともに、「やがて来る既製服時代――便利で、しかも費用が節約できる」という記事が載っている（朝日新聞社，1953，p. 199，p. 351）。日本の絹織物産業全体の抱える課題が、メディアのなかに描き出されていることを子どもたちは決して見逃さなかったのであろう。

いずれにしても西陣織の「あらゆる面での後進性」が浮き彫りとなったところで永田は、「批判」や「批難」にとどまらず、「実践のための力」になることを見据えて、西陣織がこれから発展するためにはどうしたらいいかについて作文を書いてまとめることとした（永田，1957a，pp. 153-154）。西陣織の機械化、大衆化、効率化などを求める子どもの声が実践記録には掲載されている。これらの作文は、「西陣織」という名称の文集にして完成させた後、協力者に配布したという。

以上検討してきたように、永田は、単元「西陣織」の展開において、さまざまな情報を伝えるメディアから、対象とする問題に関連する内容を子どもたちと読み解き、共通理解を図るこ

とを試みるとともに、必要な情報を整理して子どもたちと新たな資料をつくりだしていくということも行っていた。永田自身、授業でグラフ等を提示する際、「子どもたちには、程度の高い統計をナマのままであたえるのではなく、これを分解し、さらに焦点をしぼって、総合的な子どもの判断をみちびくように活用する」ということも考えられるし、「子どもに作らせるものと、教師が作って示すもの」の区別をしたりすることも必要だと主張している（永田，1960a，pp. 43-47）。こうした永田の取り組みは、どこか遠く離れたところにある資料を引っ張ってきてそのまま記載・転用して終わりにするのではなく、問題に対する理解と認識を深めていくということがメディアの活用において重要であることを示唆しているものと考えられる。

なお、先述の桑原（1954a）は、永田の実践を含む当時の日生連の問題解決学習について、ともすれば偶然に左右される「犬棒式問題解決の谷間」に陥っていることを批判している（p. 33）。なかでも、「中途半ぱな解決（それは、実は解決とはいえないものです）で満足していくようなメンタリティ」が子どもたちのなかにできあがったりすることを桑原は懸念した（桑原，1954b，p. 7）［強調は原典のまま］。その上で、そもそも「大人（教師もふくめて）でさえ、なかなか解決できない問題を、子どもに解決させようとすることが、どだい無理というものではないでしょうか」と問いかけている（桑原，1954b，p. 7）。桑原によれば、むしろ、「子ども自身が問題を発見し解決するためには、その前提としての知識がどうしても必要だ」として、「科学的な知識、技能を目的的、計画的に教えなければならない」ということになる（桑原，1954b，p. 6）。

こうした批判に対して、永田は「子どもたちの学習による問題の解決とは、既成の考え方や立場を反省検討して、立場をかえて問題を見てみたり、現存する矛盾を構造を合理的に変えてみて考えることにあると思う。そして新しい正しい認識をもつということに重点をおくべきだと思う」（永田，1957a，p.156）と主張している。ここで「新しい正しい認識をもつ」という言葉が永田自身から出ているように、単元「西陣織」において、問題に対する認識を子どもたちの疑問や問いに耳を傾けながら深めていく際、永田はメディアを機能的に生かそうとしていたという点を忘れてはならない。

5. まとめと今後の課題

本論文では、単元「西陣織」における問題解決的な学習のなかで、メディアがどのように位置づけられていたのかについて検討してきた。問題に対する認識を深めていくとき、メディアが伝える情報について子どもたちと共通理解を図ったり、取り上げる問題に焦点をしぼったかたちで新たな資料を作り上げたり、そこからさらに生じる疑問や問題点を確認したりしながら、次の学習へとあゆみを進めていくという単元展開は、メディアの活用が声高に叫ばれる現代から見ても非常に興味深い。

なお、永田は、産業としての西陣織を検討するなかで、その生産組織の「後進性」だけではなく、西陣織に携わる人々の「職人芸」に対する「自負」や「誇り」「プライド」にも直面していた。つまり、そこには、封建制や搾取、非人間的などという「よくマルクス主義の人たちが言うような言葉では拭えきれないものがある」ということも感じていたとされる（金馬，2016，

p. 26)。当時の日生連が模索していた「日本社会の基本問題」の方向性からもう少し距離を保つことができたならば、こうした西陣織の魅力にもっと迫り、永田がねらいとした「広く」「多角的に」西陣織の今後の展望を描く学習になったのではないかとも思われる。

後年、永田は「自分の問題意識に支えられた解決のための学習が重要」であると述べ、そうした問題解決的な学習によって培われた能力は「その後の人生に長く生き定着して威力を発揮することを、子供たちのその後の人生の歩みの中で、実際に見てきた」と主張している（永田，1987，p. 42)。その上で、「今、もう一度やるのであれば、私は『都の風』(NHK ドラマ)」[11)]等を導入に使い、内需拡大との関係にふれ、『村おこし、町おこし』に迫り、伝統ある地域の至芸品の強さを二十一世紀に向け、どう発展させるかを、結びにしたいと、ひそかに思う」と述べている（永田，1987，p. 42)。こうした永田の思いを、いまを生きる私たちがどのように引き継ぎ、どのような実践として展開していくかについては、今後の課題としたい。

注

1）所在地は京都市中京区高倉通六角下ル和久屋町であった。現在は京都市立高倉小学校の敷地に「日彰校記念之碑」がある（右図 1)。『日彰百年誌』によれば、1951（昭和 26）年度に京都市教育委員会よって中京東支部研究校に指定され、「“問題解決学習”」をテーマに 1952（昭和 27）年 2 月 4 日に研究発表を行った（日彰百年誌編集委員会，1971，pp. 295-296)。当時は「前近代性の払拭」が意識されていたという声もある（同上，p. 379)。



図 1　日彰校記念之碑
（筆者撮影 2025 年 9 月）

2）永田時雄は、1944（昭和 19）年に京都師範学校を卒業後、海軍に入隊し、終戦とともに小学校教師になった。現在の京都府亀岡市の馬路小学校に勤務の後、1947（昭和 22）年に京都市立日彰小学校に着任した。それから 10 年ほど日彰小学校で働いた。その後は、京都市教育研究所研究員や、東京の私立和光学園の教諭を務めた後、1967（昭和 42）年に（株）荏原製作所に入り、その研修室長や荏原実業株式会社顧問となるなど企業内研修に携わった経歴をもつ。なお、日比（1976a）によれば、1953（昭和 28）年度、当時、28 歳であった永田は単元「西陣織」実践に際し、「子どもたちを四年生から持ち上って」担任しており、一学期には単元「農村の問題と私たち」を実施した。その最中、6 月に開催された日本生活教育連盟の四日市集会に参加した永田は、実践者:樋浦辰治による単元「用心溜」(『カリキュラム』第 35 号, 1951 年 11 月号, pp. 53-58 掲載）について日比と語り合うなかで、「もっと社会科らしく知的に幅と深みのある単元展開でありたい」と考えていたようである（p. 102)。永田が単元「西陣織」の「本格的な実践に着手したのは一〇月に入ってから」であり、「二学期いっぱいを費し、三学期に少しくいこんだかもしれない」とされる。なお、三学期は単元「百貨店と商店」を取り上げたという。

3）単元「西陣織」と教科書との関係を検討した久保田・福田（1954）は、「この単元を展開していくのに、たいへん参考となる資料を提供する教科書はあまりないといえましょう」と指

摘した。

4）日本生活教育連盟の機関誌タイトルは当初、コア連時代からの『カリキュラム』を引き継いでいたものの、1959（昭和 34）年 1 月から『生活教育』へと名称変更している。

5）現在の日本生活教育連盟のホームページによれば、改称は「内外のコア・カリキュラム批判を主体的に受けながら前進した」ものであったとされる。当時の「梅根悟（第二代委員長）は『生活教育というわれわれの主張する教育原理が政治的圧力のもとに、押し殺されようとしているこの危機に当たってわれわれは思いを新たにして「生活教育」の旗がしらをはっきり誌名にかかげて前進したい』と述べた」という。https://www.nisseiren.jp/（閲覧日 2025 年 9 月 4 日）

6）その全文は『カリキュラム』第 58 号、1953 年 10 月号、pp. 18-19 に掲載されている。

7）楫西（1906-1964）は 1953 年時点で東京教育大学教授であり、日本資本主義発達史に関する研究などを行っていた。

8）日彰小学校は、西陣織の直接的な生産従事者の多い上京区からは離れた距離にあった。

9）永田は、後年、振り返って次のように述べたという。「西陣の封建制、それから貧困性、それから零細企業というようなものを調べてくるとともに、パーセント、地理、歴史というのを、切り離してではないけれども、違う時間に教えたことがたくさんあります」。「問題解決学習をやりながら、そのときに出てきた数学的要素のところを算数の時間に充当したり、それから作文の時間に感想を書かせたり、見学のルポをやらせたりしたときの書き方というのは国語の時間に。それから図表やらそういうものを作るときは図工の時間のところに当てました。そうすると、問題解決学習によって出てきた子どもたちの問題意識があるから、基礎課程に対するインセンティブがありました。だから積極的に取り組む、というふうな結果があったと思います」（金馬，2016，p. 24）［原典内の下線等は削除］。

また、永田は子どもたちの意見をもとに問題解決を進めていく際、板書の技術の重要性も指摘していた。「子どもの発言の骨子になる点を、板書によってかきとめて進めないと、一人一人の発言が、クラスのみんなの子どもの学習となりにくい」（永田, 1957a, p. 205）。右図 2 は、単元「西陣織」導入部分の板書イメージである。中段部分からはチョークの色を変えて、子どもたちに「まとめると、どういえるだろうかね」、「着る時は、どんな時といえばよいだろう」と問いかけ黒板に子どもたちの意見を構造化していった様子をうかがい知ることができる。

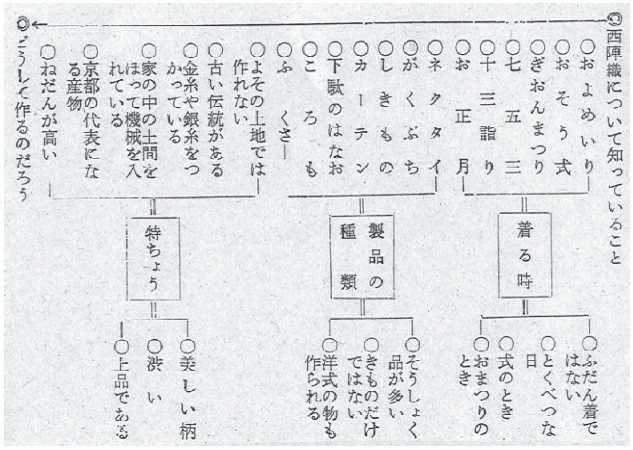

図 2　単元「西陣織」導入部分の板書イメージ

【出典】永田，1957a，p. 204

10）後藤（1926-1998）は、1954 年当時、京都大学経済学部講師で近代経済史を専攻していた。論考「永田さんから相談を受けた者として」を『カリキュラム』に載せた（後藤，1954，pp. 54-55）。

11）NHK「朝の連続テレビ小説」として 1986（昭和 61）年 10 月から翌年 4 月まで放映された。京都の老舗繊維問屋に生まれた娘が、後継ぎのことで父親に反抗、家出し、戦後にファッションの世界で活躍するという物語。https://www2.nhk.or.jp/archives/movies（閲覧日 2025 年 9 月 8 日）

参考文献

朝日新聞社（1953）『少年朝日年鑑 昭和 28 年版』朝日新聞社.
梅根悟（1953）「社会科の岐路――文部省のいわゆる社会科改善の措置について」『カリキュラム』第 57 号、1953 年 9 月号、pp. 14-19.
大村栄（1951）「四年単元『用心溜』の検討――単元指導法研究 4」『カリキュラム』第 35 号、1951 年 11 月号、pp. 53-58.
楫西光速（1953）「『近代工業』の分析視角について」『カリキュラム』第 59 号、1953 年 1 月号、pp.52-53.
川合章（1979）『社会科教育の理論』青木書店.
京都市教育委員会編（1997）『日彰――輝ける 124 年のあゆみ（閉校記念誌）』京都市教育委員会.
金馬国晴（2016）「問題解決学習『西陣織』・『水害と市政』の再評価――コア・カリキュラムおよび全面主義道徳との関連から」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 I 』第 18 巻、pp. 20-37.
久保田浩・福田章太郎（1954）「教科書使用の視点から」『カリキュラム』第 62 号、1954 年 2 月号、pp. 57-58.
桑原正雄（1954a）「問題解決学習と系統的学習」教育科学研究全国連絡協議会編『教育』第 31 号、1954 年 4 月号、pp. 24-33.
桑原正雄（1954b）「ふたたび『問題解決学習と系統的学習』について」『歴史地理教育』第 1 巻第 2 号、pp. 2-13.
後藤靖（1954）「永田さんから相談を受けた者として」『カリキュラム』第 62 号、1954 年 2 月号、pp. 54-55.
小原友行（1998）『初期社会科授業論の展開』風間書房.
坂西志保編（日本書籍社会科編修委員会著）（1952a）『小学生の社会（5 中）めぐる機械』日本書籍.
坂西志保編（日本書籍社会科編修委員会著）（1952b）『小学生の社会（5 下）生活は進む』日本書籍.
佐々木信三郎（1932）『西陣史』西陣織物館.
佐々木信三郎（1947）『織物の西陣（京都叢書 8）』高桐書院.
下中弥三郎編（1953a）『綴方風土記（第 3 巻）関東篇』平凡社.
下中弥三郎編（1953b）『綴方風土記（第 7 巻）北陸・山陰篇』平凡社.
髙山芳治（2014）「小学校社会科における問題解決学習――永田時雄の『西陣織』（小 5）の分析と考察」『大谷学報』第 93 巻第 2 号、pp. 1-23.
田中耕治（1994）「問題解決学習論争」『教職研修』1994 年 11 月増刊号、pp. 218-221.

中西仁（2013）「永田時雄・『西陣織』再考」『立命館産業社会論集』第 49 巻第 3 号、pp. 33-48.
永田時雄（1954a）「五年単元『西陣織』」『カリキュラム』第 62 号、1954 年 2 月号、pp. 48-54.（日本生活教育連盟編（1956）『生活教育の前進Ⅶ社会科指導実践編』誠文堂新光社、pp. 182-191.）
永田時雄（1954b）「『西陣織』への批判にこたえる」『カリキュラム』第 67 号、1954 年 7 月号、pp.24-26.
永田時雄（1955）「六年単元「平和貿易」――デフレ政策による中小企業不振の打開策を求めて」「この単元（平和貿易）と六年の子ども――報告者の立場から」『カリキュラム』第 80 号、1955 年 8 月号、pp. 71-80.（日本生活教育連盟編（1956）『生活教育の前進Ⅶ社会科指導実践編』誠文堂新光社、pp. 192-198.）
永田時雄（1956）「実践記録に課せられた問題」『カリキュラム』第 88 号、1956 年 4 月号、p. 90.
永田時雄（1957a）『社会科の新しい授業――高学年』明治図書出版.（再版，1959）
永田時雄（1957b）「教師生活の悲哀」「地域による型」「地位による型」永井道雄編『教師――この現実』三井書房、pp. 36-49、100-111、112-125.
永田時雄（1957c）「子どもの生活の中にひそむ農村問題をほりおこす」『カリキュラム』第 98 号、1957 年 2 月号、pp. 65-69.
永田時雄（1957d）「問題解決学習として――単元「税金問題」を中心に」『カリキュラム』第 103 号、1957 年 7 月号、pp. 33-35.
永田時雄（1959a）『都市の子どもと学力（教師の仕事：第 13)』明治図書出版.
永田時雄（1959b）「私たちはこんな社会科を実践する☆小学校高学年」『カリキュラム』第 11 巻第 1 号、1959 年 1 月号、pp. 24-29.
永田時雄（1959c）「健康の単元の展開資料」『カリキュラム』第 11 巻第 6 号、1959 年 5 月号、pp.48-51.
永田時雄（1959d）「都市の子ども」『カリキュラム』第 11 巻第 7 号、1959 年 6 月号、pp. 38-42.
永田時雄（1959e）「社会科学習の科学性」『カリキュラム』第 11 巻第 7 号、1959 年 6 月号、pp. 52-55.
永田時雄（1959f）「子どもの変革エネルギー」『カリキュラム』第 11 巻第 12 号、1959 年 11 月号、pp. 20-23.
永田時雄（1959g）「労働をどう指導してきたか――働くことを知ることの統一をめざして」『カリキュラム』第 11 巻第 13 号、1959 年 12 月号、pp. 40-44.
永田時雄（1960a）「社会科における統計資料の活用 」『生活教育』第 12 巻第 2 号、1960 年 2 月号、pp. 43-47.
永田時雄（1960b）「随想――現場に生きる理論を」『生活教育』第 12 巻第 7 号､1960 年 7 月号、pp.80-81.
永田時雄（1960c）「授業開始の三分間」『生活教育』第 12 巻第 10 号、1960 年 10 月号、pp. 101-107.

永田時雄（1960d）「指導の焦点」『生活教育』第 12 巻第 11 号、1960 年 11 月号、pp. 90-95.
永田時雄（1960e）「教育技術の創造母胎」『生活教育』第 12 巻第 13 号、1960 年 12 月号、pp. 98-103.
永田時雄（1960f）「力ある実践をみちびくための四つの問題」『生活教育（国民教育の今日的課題：生活教育の前進第一〇集）』1960 年 12 月、pp. 22-31.
永田時雄（1961a）「高学年の一時間の授業」小林喜三男ほか『一時間を充実させる方法』明治図書出版、pp. 116-132.
永田時雄（1961b）「自分に言いきかせつつ」『生活教育』第 13 巻第 14 号、1961 年 12 月号、pp. 80-81.
永田時雄（1962）「高学年社会科の検討」『生活教育』第 14 巻第 12 号、1962 年 11 月臨時号、pp.119-129.
永田時雄（1964a）「授業構造と授業案」『生活教育（社会科授業案・50 選：生活教育の前進第一五集）』1964 年 1 月、pp. 18-28.
永田時雄（1964b）「授業研究の周辺のこと」『生活教育』第 16 巻第 3 号、1964 年 2 月号、pp. 23-29.
永田時雄（1964c）「新教育の根拠地――ある私立学校の 30 年史から」『思想の科学』第 5 次第 23 号、1964 年 2 月号、pp. 21-29.
永田時雄（1965）『現代社会の課題にどうせまるか（現代の授業：1 社会科）』明治図書出版.
永田時雄（1974）『生涯教育を求めて――企業内教育の現実と期待』ダイヤモンド社.
永田時雄（1983）『会社で学ぶ――自己啓発と企業内教育（ちくまセミナー 10）』筑摩書房.
永田時雄（1983）「生涯学習のすすめ」人事院総務課編『人事院月報：公務員関係情報誌』第 36 巻第 5 号、1983 年 5 月号、pp. 1-3.
永田時雄（1987）「『西陣織』実践の概要」「30 年ぶりに追試をされて」『教育科学社会科教育』第 24 巻第 302 号、1987 年 9 月号、pp. 39-42、52-55.
永田時雄・原芳男（1960）『教師自身――その生活変革』福村書店.
永田時雄・丸木政臣（1962）『教師たち――悩みと希望』筑摩書房.
日彰百年誌編集委員会編（1971）『日彰百年誌』日彰百周年記念事業委員会.
日本太平洋問題調査会編（1949）『日本社会の基本問題』世界評論社.
波多野完治・高木浩朗・永田時雄・馬場四郎（1959）「座談会：都市の子どもをめぐって」『カリキュラム』第 11 巻第 12 号、1959 年 11 月号、pp. 76-83.
馬場四郎・楫西光速（1952）『日本社会の基本問題――高等学校一般社会（上・下）』教育図書.
春田正治（1988）『日生連物語――戦後生活教育運動のうねり』民衆社.
日比裕（1968）「コア・カリキュラムと問題解決学習（その六）――転換期の二十七年と単元『西陣織』」社会科の初志をつらぬく会編『考える子ども』第 59 号、1968 年 5 月号、pp. 68-71.
日比裕（1976a）「反封建を軸として地域に迫る問題解決学習の骨組み――小 4『用心溜』（樋浦辰治）と小 5『西陣織』（永田時雄）」『教育科学社会科教育』第 151 号、1976 年 8 月号、pp. 101-107、126.
日比裕（1976b）「反封建を軸として地域に迫る問題解決学習の骨組み（その 2）――小 5『西陣織』（昭二八・永田時雄教諭指導）」『教育科学社会科教育』第 152 号、1976 年 9 月号、pp.

116-122.
広岡亮蔵（1950）「牧歌的なカリキュラムの自己批判」『カリキュラム』第 15 号、1950 年 3 月号、pp. 12-17.
広岡亮蔵（1955）『学習形態』明治図書出版.
二杉孝司（1980）「問題解決学習と系統学習」柴田義松編『教科理論の探求――戦後教科研究の展開』東京大学教育学部教育内容研究室、pp. 3-17.
二杉孝司（1983）「日本社会の基本問題と問題解決学習――一九五四年・永田時雄・『西陣織』（五年生）の授業」民教連社会科研究委員会編『社会科教育実践の歴史――記録と分析・小学校編』あゆみ出版、pp. 97-131.
舟橋一男（1994）「永田時雄の『西陣織〈中小工業〉』の実践――歴史的現実に立つ社会科単元学習の典型」『生活教育』第 46 巻第 4 号、第 547 号、pp.42-45.
堀江英一・後藤靖（1950）『西陣機業の研究――中小工業の実態』有斐閣.
松本達郎（1954）「中小工業をどうみるか――分析視角について」『カリキュラム』第 62 号、1954 年 2 月号、pp. 55-57.
都新聞社（1952）『京都年鑑（昭和 28 年版）』都新聞社.
文部省編（1981）『学制百年史』帝国地方行政学会.
山根栄次（1990）『「経済の仕組み」がわかる社会科授業――経済思考力を子どもに育てる』明治図書出版.